

処女に捧ぐ者たちの宴

佐伯寿和2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある晩、母の寝室を訪ねたメアリーは思いがけず母、アリスの秘密を知る。そこで出会ったハートトの女王。知らず、知らずメアリーは女王の戯れに飲まれていく。

メアリーを中心に飛び交う様々な『愛』の連鎖。それはいつしか『快樂』と名を変えて彼女たちの人生を複雑怪奇に染め上げていく。

そうして望まない再会を果たすメアリーと女王。メアリーが女王の正体に気づいた時、同時に自分の正体を知ることになる。

歌い手『Iuzさん』、楽師『奏音69さん』、絵師『RAHWIAさん』による作品『ROYAL SCANDAL』の二次創作です。

拙い解釈で描いた作品ですが、どうぞ最後までお付き合いください。

目次

1	猫の猫による猫のためのcocktai	21
	三月の白兔は青い目をしている	10
	処女の戯れ	1

処女の戯れ

『いったいママは何処どこにいるのかしら。』

ある日見つけたママの『秘密の花園』。どこまでも、どこまでもグルグルと潜つていく、夢へと続く階段を『甘い香り好奇心』に誘われるままに降りていく。

もしも、あの階段を最後まで降りなかつたら……、

——私はまだママと一緒にいられたのかしら——

——ラヴィは私の側で笑い続けてくれたかしら——

——チェシヤは私を愛してくれたのかしら——

ある日の夜、ママの寝室を訪ねてみると、部屋にママはいなかった。窓の外から、星一つない空に上弦しじょうげんの三日月お月様だけが私に微笑ほほえみ、私の顔を覗き込んでくる。

『もう随分と遅い時間なのに、まだ書斎しよさいにでもいるのかしら。』
戻ってくるのを待とうとベッドに腰掛けていたら、直ぐすに蝶番ちようつがいの擦れる音がした。ママが帰ってきたんだと思って入口を振り返ったのに、口を開けたのは『見知らぬ扉』。

思わずベッドの下に隠れて様子を伺うと、そこから現れたのはやっぱりママだった。

ママは扉を開めると、動かされた鏡台きやうだいの上の『小箱』に何かをしまっていた。

ママは『小箱』に何かをしまうとまた、扉の向こうへと消えていった。誰もいなくなつたのを確認すると、私はベッドの下から這い出て、スルスルと鏡台へと近寄つてみる。

鏡台の上の小箱は飾り気のない、地味なもの。鍵はない。私は箱を開けてみた。

どうしてだろう。これはママの物で、勝手に触つたら怒られるかもしれないのに、私は自然に『それ』を手に取っていた。

『それ』は、一本の鍵。

溝みぞは単純で、柄えの先端には羽の生えたハートの紋章エンブレム。やっぱり見たことなんか無い。

でも、その鍵を持っているとなんだか私わたしが私ママになつたような気がして、気が大きくなつていくの。

それに、なんだか全身がフワフワと夢の中にいるような気分にもなつたわ。

真つ暗な空の三日月がニヤニヤと見下ろしている。

三日月は私の背中を押すように『見知らぬ扉』を照らし、私はされるがままに扉の前に立つてみる。

するとそれは、とても背が低かつた。12才の私の背丈と同じなのだから、大人のひとは皆、腰を曲げなきやとてもとても中には入れない。

調べてみると、ドアノブはあっても鍵穴はなく、引けば簡単に開いた。すると、私の中の好奇心が嘯ささやいてきた。

『この鍵は何処の扉を開けてくれるんだろうね。』

もう私はこの鍵の正体が知りたくて、知りたくて仕方がなくなってしまうたわ。覚悟なんて必要なの？ いいえ、楽しむだけよ。

振り返るとやっぱり夜空の中には三日月の微笑みだけが浮かんでいて、高みの見物とも言うように私の様子を見守っているの。

私はハートの鍵を持つて扉の向こうへと足を踏み入れる。

扉は底の見えない螺旋階段らせんに続いていました。

階段の外壁にはアール・ヌーボーを意識したような細かい装飾そうしよくが施ほどこされているのだけれど、照明が弱過ぎて詳しくは見えない。

一段、一段、端から端まで、足が僅わずかに沈む上等な赤い毛氈もうせんが敷き詰められていて、それはまるで王様か何かが玉座まで進むためにあるようななどとも立派なものだった。

だからなんだか、新しい階段を踏む度にイイ気分になったわ。

でもそんな小さな遊びじゃあ、あつという間に飽きちやうの。もつと面白そうなものがないか辺りを見回しながら進むのだけれど、これといつて私の気を惹ひくようなもの見つからない。

ここにはあの月明かりも届かない。

2階の寝室から伸びていた階段は、もうすでに地下に潜つていてもおかしくない。それくらいグルグル、グルグルと下りていった。

どこまで下りても周りの照明は薄ボンヤリとしていて、見上げてみても見下ろしてみても、スツカリ暗闇に飲まれてしまっているの。入口も出口も見えない。だからちよつとだけ不安になつてきちゃつた。

なんだかその黒い、黒い闇の中から誰かが私を見て笑っているような気がしたの。そう思つた矢先だつた。

『あら？』

階段の終りが見えてきた。そしてその先には妙な扉が待ち構えているのが見えた。

入口の『小さな』扉とはうって変わつて、巨人でも通れちやうような『大きな』縦長の扉。そして、扉の頂点には鍵と同じハートの紋章エンブレム。それが私を見下ろしている。

私はやっぱり少しも警戒することなく扉に近づいてしまうの。まるでこの地下の主あるじにでもなつた気分。これも、この鍵がそうさせているのしら。

すると、扉の向こうから人の話し声と生温かい吐息が交互に聞こえてきた。穏やかなのに熱くて、淡白たんぱくなのに蜂蜜みつのように滑なめみのある声と吐息。

『さあ、お前も跪ひざまづいてワタシに誠意まことを述べなさい。』

私を見下ろすハートが、そう言っているような気がしたの。

私は抗あちがえない。導かれるままに、差し込んだハートの鍵を回す。

『ガチャリ』

響いた重い解錠音は私の心のある部分かいじようおんを刺激した。私はゆつくりとハートの扉を開け放つ。

そして始まる。止まらない悪夢快樂。

私は思わず目を瞑つぶってしまったわ。

だって、扉の向こう側から溢あふれ出るのは眩まばゆいばかりの黄金色の輝き。格差を知らしめるような荘厳そうごんな装飾。どれもこれも、私が今いる場所とは正反対の『力強さ』を持っているんだもの。

そして、そこにいたのは獣の群れ。卑いやしくも忠実な様子を見せる彼らは、まるで狗いぬの群れ。そして、群がる獣の中心に立つのは、さながら女王様ハートの主。

狗おとこたちは皆、仮面忠義を被おとこって女王様の愛撫あいぶに悶もたえている。次の愛撫を求めて喘あえいでいる。

女王様は身を寄せ、快樂に身を振よじる淫みだらな狗を見て笑っている。

「アナタは誰なの？」

「狗だか兎だか分からない妙な『仮面』を被った男たちに囲まれる中でただ一人、『素顔』を晒す女王様。」

私は、赤と黒の派手なドレスに身を包み、狗たちを弄ぶ、彼女の顔に見覚えがあつた。答えには、すぐに行き着いた。

それは、この地下室の入口で見かけたものと同じ。

「……もしかして、ママなの？」

扉を隠していた鏡台に写り込んだ私の顔と全く同じだった。女王様は、私がそうであるように、私を見て放心している。

どうやって『あの娘』はここに入ってきたと言うの？

なぜ『私』は鍵をわざわざ箱に戻したのかしら？

どうして『私』はその箱を化粧台の上に置きっぱなしにしたのかしら？

そして……、私に瓜二つな『あの娘』は……、誰なの？

『……そうよ。全部、私がそう仕向けたこと。』

『……そうよ。私は鏡の中の私。次はメアリーの番。』

まったく。魔女なんて呼ばれる女は根っからの性悪女ね。誕生日でもないのにこんな御馳走を寄越すなんて。でもまあ、歓迎するわ。『好奇心』に素直な私の娘よ。

「優しいのママはどいっ？」

アレが何か言ったかしら？まあ、そんなことはどうでもイイこと。

これこそ私が望んだモノなのだよ。サククスブルーのエプロンドレスを着た、この子こそ二人目の私^{アリス}。

「さあ、アリス。こちらにおいて。私の第二の心臓よ。私を楽しませておくれ。」

純粹無垢な、この舞踏会を彩る私のための晚餐^{ディナー}。

さあ、さあ、面白可笑しく踊っておくれ！

メアリー^私は走った。

ウソよ。ウソ、……ウソ。あの女王様はママと同じ顔の悪魔なんだわ。だって、ママはあんな歪^{ゆが}んだ顔で笑わないもの！私を『アリス』だなんて呼ばないもの！

そうよ、これもその悪魔が見せている夢なんだわ。

『助けて、ママ！』

「お前たち、私のダイナーを捕まえておくれ。」

女王様^{悪魔}を取り巻く男たちは、弱った獲物で遊ぶように私を追いかけてくる。

走つても、走つても扉の外へ出られない。狗たちは私の背後にピッタリと張り付きながら囁きかけてくる。

「お待ちなさい。お待ちなさい。女王様女王様のアリスの処女処女のアリス。」

「お待ちなさい。お待ちなさい。魔女魔女のアリスのデイナーデイナーのアリス。」

「お待ちなさい。お待ちなさい。快樂快樂のアリスのハートハートのアリス。」

「違う。止めて。それは私の名前じゃないわ！」

享樂きょうらくに魅入みいられた狗たち。彼らが、口から出まかせを積み重ねるほどに、彼らの欲望本音は露あらわになつていく。

足を引っかけ、扉に凭もたれ掛かるように倒れ込む。恐怖で足が竦すくんで動けない。迫ってくる狗たちの愛撫。私はもう、抗えない。

『ガチャリ』

重たい響きとともに、暗闇の中から突然差し伸べられる紳士の手。

私は迷わずその手に縋すがった。

紳士はまるで魔法か何かのように、ひとつ飛びで長い螺旋階段を飛び越えた。

振り返る暇もなく、私は女王様悪魔の魔の手から逃れられた。

鼻から上を『仮面』で覆おおった、ドレスコードに忠実なタキシードの紳士。私を助けてくれた人は笑っていた。あの三日月のように。

紳士は私の手から鍵を受け取り、鍵穴のない小さな扉に鍵を刺す。

『ガチャリ』

重たい響き。甘い、シトラスの香り。

悪夢から逃げ果せた私の傍に、彼はいた。

「目が覚めたかい、エルシイ。」

彼は、あの三日月のような微笑みで私を見詰めていた。

彼の手には私の心を掻き乱すハートの鍵があつた。

三月の白兔は青い目をしている

今日も今日とて蜜蜂たちは私のためによく働いてくれている。それもこれも私という『花』が魅力的だから仕方のないことよね。

客のいない午前0時、このお店で一番の支配者はマルガレーテでもあの娘でもない。私なの。

この店で一番魅力的な女、それが私。

『Bar・Masquerade』の舞台を飾るのも本当は私の仕事なのに、ママは気づいてくれない。もうとづくにママの時代は終わったのに。

だから私は店中の従業員を飼って私の方が上だつて気づかせてあげるの。

なのにあの娘つたら、毎晩、毎晩、店じまいの度に歌の練習なんてしてるのよ。当て付けのつもりか知らないけれど、客のいないステージで喘いでバカみたい。能無しは大らしく掃除だけしてればいいのよ。

モップをマイク代わりなんて上品じゃないことも私はしない。可愛い私にシンデレラは似合わないもの。

下品な仕事に用はないの。なんたつて、私には昼も夜も惜しみなく働いてくれるたく

さんの蜜蜂がいるのだから。

私はただ、可憐な薔薇を演じ続けていけばいいの。

客だろうと、ママだろうと関係ない。昼も夜も関係ない。皆、同じ。ちよつと私が甘い声で囁けば誰も彼もが私の蜜蜂になるの。

だからアリス、そんなことをしても無駄なのよ。気づけないアナタは雑花。精々、タンプポヤスミレが関の山。客の目を惹く『薔薇』にはなれないのよ。

いづれ、この店は私の物になるんだから。それに気づけないアナタはやつぱり無能な雑花。

けれど、いつまで経っても、いつまで経っても、ママは私に主役の話をくれない。

仕事が終わればバーテンダーとカウンターで世間話ばかりして私に見向きもしない。たまにあの娘の拙い歌を見て笑っているだけ。

本当に、どうかしているわ。きつと、お酒の飲み過ぎで頭がオカシクなっているんだわ。そうじゃなきゃ、私みたいな逸材を放っておくはずがないもの。

もうママには頼らない。こうなったら自分の手でモノにするしかないんだわ。そのためは、もつとたくさんの駒が必要ね。

私が求める『快樂』の全てを叶えてくれる、弾丸のように強く、激しい蜂が。

そうして私が献身的努力に明け暮れているっていうのに、私は裏切られてしまった

の。私は見てしまったの。

ママがあの娘にレッスンをつけているのを。

『どうして?!』

「近々、ステージで歌わせるらしい。」

私の蜜蜂は、ママとチェスニーの会話を聞いたらしいのだけれど、私は信じない。

『何を考えているの?!』

これみよがしに、赤と黒の派手なドレスまで用意して。それじゃあまるで、『薔薇の花』じゃない!

数日後にはママが手配したデザイナーからポスターが届いた。あの娘のデビューを告知するポスターが――。

『冗談じゃないわ!』

私より不細工なくせに、キレイな華になろうとするあの娘が「嫌い。」

客を夢中にさせる愛嬌もないくせに、私を見下す舞台に立つあの娘が「嫌い。」

私がかんなに頑張っているのに、卑怯な手でママを誑かしたあの娘が「嫌い!」

派手で、下品で、真つ赤な花卉を着て浮かれているあの娘が「嫌い!!」

裸の身体に、蜜蜂たちがウルサイ羽音を立てて群がる。お尻を振って仲間を呼び、花

の宴うたげはさらに熱を帯おびる。

もつと強く！もつと激しく！もつとよ。もつと、もつと、もつと、もつと！！

銃身バレルも弾倉シリンダーも熱で溶かすくらいにメチャクチャに突き上げてイイのよ！！

可愛い喘喘ぎ声声だつて聞かせてあげてよ。狂えるほどに気持ちよくしてあげるわ。

だからもつと、私の『望み』を叶えなさい！！

ダメね。まだなの。まだまだ私は満たされない。いくら弾倉シリンダーに弾を詰つめてみても、標的的がいなきや名器タカラの持ち腐れ。そうでしょ？

「ねえ、あの娘こを可愛こ愛いがつてあげてよ。」

満たされた六匹の蜜蜂は私の命令に喜んで従つたわ。

あの下品なドレスに針を仕込んだり、ネズミの死体を入れたティーポットでお茶を飲ませたり、食事にイモムシを混ぜたり。

あの娘こはこの店に友だちなんていないから、蜜蜂たちの『遊び』を誰かに言い触ふらすなんて真似まねはできないのよね。だからオモシロイの。

本当は一番気に喰くわない、あの下品なドレスを滅茶苦茶にしたいところだけれど、一応、ママが用意したものだから手を出さないであげたの。

でもね、これはただの『遊び』なんだから。私は蜂たちに『可愛こ愛いがつて』と命令した

の。だからアリス……、たの愉しい、名も無い花愉しい愛撫夜はこれからのよ。

六匹の蜜蜂に囲まれて、名も無い花処女は何を差し出せば良いか分からない。オドオドしている内に男たちはナイフ針を差し出し、動けない花の蜜を吸って、吸って、吸い尽くすの。

どうかしら。私が撃った弾丸タマはアナタを熱くさせてくれたかしら？ 血を流したかしら？

ああ、アナタの悲鳴喘ぎ声が聞いてみたかった。

フフフ。まったく、いい気味だわ。

これであの娘は店を出ていくものだと思ってた。でも、違った。とんだ、私の計算違い。まさか、顔色一つ変えずに残っていられるなんて。

まったく、なんてしぶとい娘こなの？ 例デビュのー日までもう時間がないのに。だから根っからの召使いは嫌いよ。犯されるのも仕事の内だと思ってるんだから。

もつと、何か決定的な『モノ』を奪ってあげなきゃいけないんだわ。

「チエスニー、チエスニー。聞いてくれる？ 私のデビュメアリーアンーに新聞記者が来てくれるの。私、新聞に載のるかもしれないのよ！」

そうよね。アナタは我慢強い子だったものね。

でもアナタは言ってたわよね。お母さんに裏切られて逃げてきたんだって。

そうよね。同じことをしてあげればイイのよね。待つていて。私が最高の舞台ステージを用意してあげるわ。

ああ、あの娘この『弱み』が手の内にあるなんて、なんて気持ちイイの。蜜蜂に囲まれているよりもずっと、ずっとイイわ。

閉店後、蜜蜂たちに人払いをさせて今は、チエスニー野蜂と二人きり。

「ねえ、チエシヤ。そんなに沢山のポスター、どうするつもりなの？」

憎たらしい。ママの言いつけなんでしょうけど、なんて憎たらしいの。それが店を彩いろどるかと思うと苛いらだ立ちで腸はらわたが煮えくりかえりそうだわ。

……でも、それも今夜限りね。

「ねえ、チエシヤ。アナタは女がどんな声で啼なくのか知ってる？」

私、決めたのよ。アナタの手であの娘こを穢けがしてあげるの。殺すよりはマシでしょ？

愛撫するなんてお手のもの。無防備な野蜂カレの上に馬乗りになれば、ほら、もう飛んで

逃にげげることだつてできない。もう、私のモノ。

弾倉シリンダーが熱くなつていくのが分かる。

ああ、早く。この撃鉄忠誠心を起こして、私に引き金命を引下かせて。

「ねえ、私を愛してよ。」

仕上げに茨私のコトバの毒針でゆっくり、ゆっくり縫い留ぬめてあげるわ。

ほら、こうやって体が触れあえば……、アナタも感じるでしょ？ 私の銃身カラダがこんなにもアナタを求めてるのよ。

だから私の命令コトバだけを聞いて——。

「キャアツー！」

野蜂カレワツタシは可憐な花を突き飛ばした。拒んだ。

……そんな、……まさか、どうして。

私はただ、アナタにも私の『蜜』の味を教えてあげようとしただけなのに。私は誰も彼も夢中にさせた『花』なのよ？ 『魅力的な女』を望まない『男』なんている訳がないじゃない。

……だったらどうして？……何がいけないの？……どうして私じゃいけないの？

拒絶されるなんて初めての経験で、屈辱くつじよくよりも先に喪失感そうしつかんを覚えた。皆、私のモノのはずなのに。私のモノにならないモノがこの世にあるという失望。

ママの前ではいつも、ニヤニヤと厭いやらしい笑みを張り付けてるくせに。私を見下ろす目は、まるで枯れた花を見るように冷えきっている。

ママよりも、あの娘こよりも、私が劣おとるっていうの？ 考えられない。信じられない。皆、皆、ミンナ、どうかしているわ!!

『もう我慢ならない!』

「殺してっ!」

ナイフをホスターあの女の顔に突き立てる。そんなんじや、この怒りは収まらない。そう、もう限界よ!

「あんな女、八つ裂ぎきにして死んでしまえばイイのよっ!!」

この私が命令しているのに、男蜂どもは私を宥なだめるばかりで動こうとしない。

「落ち着け。殺しはマズイ。」

「そうだ。バレたらラヴィが捕まるぞ。」

あの女雑花を殺して、殺すのが男蜂どもで、どうして私が犯枯れた花罪者なの? オカシイじゃない。

どいつもこいつも、私をバカにしてっ!

ああ、どうしたってというの。誰も彼も私の前から離れていく。何で? どうして? そんなにあの娘この命が大事? 私の『蜜』よりも価値があるってというの?

あつという間に私は独荒野の花りぼっち。こんなに惨みじめなことってあるかしら?

あんなに従順蜜蜂だった男たちはもう一匹だっいていやしない。もう、誰も私枯れた花を相手にしな

い。

引金トリガーを引いても聞こえてくるのはヒステリーを起こした私女の金切り声ばかり。

どうして皆、あの娘の味方をするの?!

そうして無事にあの娘の晴れ舞台はやってきた。

憎しみで人は殺せない。それでも私はこのステージを見届ける。他にすることなんて何もない。

キラキラと輝く彼女を見てみると、枯れた自分が余計に惨めに思えてくる。それでも私は見届ける。今の私は、あの娘から目を逸らせないの。私から全てを奪っていくあの娘から。

躰のなつてない子どもみたいに爪を噛んで、ただ立ち尽くしてる私はなんて醜いの?!

スポットライトを浴びた雑花ごときに羨望の眼差しを向ける私はなんて醜いの?!

観客のバカみたいな歓声にさえ嫉妬する私はなんて醜いの?!

私はここに居るのに、誰にも関心を持つてもらえない私は、なんて醜いの?!

こんなに醜い私は嫌い!

『嫌い!嫌い!嫌い!嫌い!』

もう、何もかもが嫌い!!

あの娘の舞台も残すところ一曲。期待膨らむ観衆、嫉妬に溺れていく私。

「最後の歌は私の大切な友人に贈らせてください。」

不意に、私の手を小さな手が包んだ。視線を滑らせた先にはあの頃のメアリー。

「一緒に歌姫シンガーになろうと、ここで働くことを勧めてくれた貴女あなたとの約束。」

違う。途方とほうに暮れた私に生きる希望約を交わしてくれしたのは、真つ赤な薔薇を手にしたあの子。

「ずっとここで、貴女を待つてるから。」

『ラヴィ、私、貴女が大好きよ。』

サックスブルーのエプロンドレスを着たアナタが、ローズピンクの私を愛してくれた。だから私は青の、アナタは赤のドレスを着ている。

……そうだったわ。

同じような境遇で、行き場のなかった私たちだから励まし合えた。手を取り合って、笑っていられた。

でも、アナタを想うと憎い母の記憶が目を覚ますから——

『ガチャリ』

重たい響きとともに、スポットライトが落下する。あの娘この真上まじに。

……だめ。…だめよ。ダメ、ダメ、ダメツ、ダメツ!!

私は走ってた。あの娘こは、突然駆け寄ってくる私を見て目を丸くしている。それ以上のことなんか分からない。私はあの娘こだけを目に映して、飛び込む。

気がつくくと、私の目の前には貴女アナタがいた。静かに見詰め合う私と貴女。

ねえ、メアリー。なんだか、胸が痛くて、痛くて堪らないわ。

蜜蜂相手に喘いでいた私も、嫉妬に溺れていた私も、痛くて堪らないの。

だからお願い、メアリー。もう一度だけ、この枯れたの胸に貴女の『優しい水』を聞かせて。

また、アナタだけを——

ウサギ
兎ウサギが死んだ。

こんな予定はなかつた。オス猫チエシヤは舞台袖から感じる視線に目を遣ると、そこには女王女王様の帽子屋マツトが、冷えていく兎ウサギにさらに冷たい視線を送贈つていた。

半端な女王女王の棺は、赤と白の薔薇で埋められた。

猫の猫による猫のためのcocktail

午前0時、それはドレスコードで理性を縛るMasqueradeの終わりを告げる時刻。

今夜もまたBarは『女たちの香水』で満たされて、酔わされた男たちはお金を手に、意中の女を探し回る。

女たちは店のための衣裳を脱ぎ捨て、男たちのための花弁に身を包む。より刺激的な男を求めて、無言で視線を飛ばし合ってる。煙草を燻らせて威嚇し合ってる姿が滑稽だわ。

女も男もそういう生き物。処女と童貞じやなきや誰だって知ってること。強姦なんてその延長線。気にする女は頭がオカシイのよ。

だから、私にも大胆になりたい時だってあるのよ。今夜だってそう。言い寄る女に靡きもしないで澄ましてる男を落としたい気分にもなるの。

アイツはいつもそう。余裕のある『微笑み』なんて見せられたら掻き立てられちゃうじやない。

あの厭らしい三日月に賭けて。思い出の衣裳を着て、アイツのポーカーフェイスを崩

してやるわ。

あの日の『歌』と『私』を添えて――

あの日の出来事は触れるだけで胸が痛くて、いつもいつも涙が抑えられない。

でも、そうじゃないとオカシイでしょ？ 薄情でしょ？

でも、安っぽい女のように泣かないわ。アイツが気に掛けてくれるようにしなきゃ

『意味』がないもの。

「エルシイ、今夜もイイ声だったよ。」

「ありがとう。」

安っぽい男たちは気づかない。

「これ、前に君が欲しがっていたドレスだよ。」

「ありがとう。」

行き着く言葉はいつも色欲レなんだもの。

「僕のも受け取ってくれないか？」

「ありがとう。」

これだからワンパター盛な男たちに興味なんて湧かないの。女の身体にしか目がいかない駄狗だけんには、営業スマイルと「ありがとう」の一言で充分。

だけど、こうして可愛らしくソファに座ってれば、その男たちが薔薇リボンの付いた箱で私

を囲んで、私の『女』を引き立ててくれるの。

だけど、私が沢山の男に囲まれていたって、アイツは素知らぬ様子。マルガレーテか客しか見ていない。悔しくはない。でも歯痒いの。

でも、まあいいわ。『誰にも靡かない』なら、他の女に盗られる心配もないものね。

「エルシイ、まだ上がらないの？」

「ママ、今日はもう少し飲みたい気分なの。ダメ？」

ママが引退してから、私の他に5人がステージに立つようになったけれど、実際、その中で私がNo. 1。客の半分以上が『私の客』。

だからママも、私の我が儘なら許してくれる。

ただの給仕だった頃、掃除中に歌つてるとよくママに怒られてた。あの頃のママは私
が店の顔になるなんて思わなかったのよね。でも、懲りない私にレッスンを付けてくれ
たし、舞台も用意してくれた。

だから店を奪おうなんて思わない。『ママの店で歌う女』で十分。ただ、同じ舞台に立
つ女が、私の上にいるのが気に入らないだけ。

「しようがないわね。チェシヤに片付けを頼んでるけど、鍵だけはキッチンと閉めておい
てね。」

分かつてるわ。むしろ、そのつもりだったから。

そして今は二人きり。それなのにアイツは私に見向きもしない。

「ねえ、チェシヤ。こつちに来て一杯付き合ってくれない？」

店を閉める準備ができたらと、アイツは掃除を続ける。

「……そう。」

言いながら手際てぎわ良く一杯のカクテル作り、カクテルグラスに盛られたチェリーを添えて私のところまで持って来ると、「バーは開けておくから、好きに言ってくれ」と言う。

そういうつもりじゃないのに。ただの口実がいつも彼の逃げ場になってしまう。

それでも私は言われた通りに待つ。

待つのが退屈。飾りの箱で気分を紛まぎらわせるのも何だか違う気がするし。彼に用意してもらったチェリーは、口にすればするほどに悶々もんもんとする。

チェシヤは真面目で寡黙かもく。その上に愛想笑いが上手だから、身の上話を聞いても笑ってごまかされてばかり。

だからチェシヤのことを詳しく知ってる人は誰もいない。私もそう。5年以上一緒に働いてるのに。

たまに彼が、実体のない幽霊なんじゃないかって疑ってしまう時があるの。ふと、彼

の顔を思い出そうとすると、あの微笑みだけが背景の中にあるような錯覚に陥るの。

分かっているのは身寄りがなく、恋人がいなく、ママと『噂』になつたことがあるけれど、『噂』を聞いた時のママの笑い方で半分は嘘なんだって分かつた。

チェシヤは、私たちがこの店で働き始めてから間もなく、男の人に連れられてやつて来た。

その人も父親じゃないこと以外は何も知らない。

何も知らないのに、いつの間にか私はチェシヤにくつついて回るようになっていた。

初めは何となく、不思議な子だと見守っていただけ。

だけど、何でもソツなく熟すあの子とは違って、私は不器用だったから。黙って助けられる彼のそばにいるのが癖になつていたのかもしれない。

彼も彼で、私がそばにいることに何も言つてこないから、それに甘えていたのかもしれない。

本当にそれだけ。他意はなかった。

だから何も起こらなかつた。期待もしなかつたし、『過ち』もなかつた。

でも、あの事件以来、私だけが彼を意識するようになっていた。

いつも傍にいた人が突然、いなくなる。彼がそうなるなんて思つてないけれど、彼女

を想えば想うほどに彼が欲しくなる。

まるで針のない時計のように、巻いても、巻いても時間の分からない不安が付きまとうの。

どうしてだかは分からない。それでも、私はその『声』に抗えないの。

モップを持った彼が私のそばを通ったから言つてやった。

「ねえ、私を愛して欲しいの。」

ここまでハッキリした告白をすれば、彼だつて少しは私に目を向けてくれると思つた。

それなのに、彼は新しいカクテルを寄越して微笑むだけ。

どういうつもりなの？ 冗談だと思つてるの？ 遊びだと思つてるの？ バカにしないでよ！

飲めば飲むほどに『気持ち』は強くなつていくのに、それが彼に届く気がしない。しよせん、夢の中でしか叶わないのかしら。

グラスから立ち上る泡しぶきが、私の気持ちそのものみたいだわ。

「チエシヤは誰かを愛したりしないの？」

「私はチエシヤから見てどういう女？」

「私に合う男はどんなだと思つ？」

何を聞いても返ってくるのは新しいカクテルと変わらない微笑みだけ。

どうして？何を考えているの？そう聞いてもどうせアナタは笑うだけなのよね？
 だったら私はどうすればいいの？

身体が熱い。このままじゃ、酔い潰れちゃう。その前に『決着』をつけなきゃ。

もしも今夜もまた、彼の『アルコール』に私の『リキキール』が濁にごされてしまうのなら、私はもう、二度と誰も愛さない。

逸はぐらかされるのはもう、真まつ平びらつ！

彼が望むのなら、私は『何色のリキキール』でも構わない。処女バージンにだってなってみせる。

私は勢いに任せてカウンターに身を乗り出した。

「ママみたいなオバさんとじゃ物足りないでしょ？私が相手になつてあげるわよ。」

彼の襟えりを掴つかんで私の唇に引き寄せながら、『気持きもちち』を告げる。もうカクテルを作る時間まも、笑う余裕も与えない。アナタの『気持きもちち』を教おえてよ。

でも、彼は私が思う以上に冷酷な人だった。そこまで乱暴に扱われるなんて思ってもみなかった。

「……………どうして？」

彼は私の手を力任せに振り払うと、私を睨にらみ付けた。それでも彼は一言も私をなじる

こともせず、静かにカウンターの片付けに戻っていく。

どういうこと？私の何がそんなに気に食わないの？アナタの言いたいことがサツパリ分からないわ！

打ち拉ひがれた私は、ソファに突っ伏してクッションに顔を埋める。

やっぱりダメ。忘れられない！あの子も、貴方も!!

デビューの時に、初めてチエスに贈ってもらった薔薇バラの髪飾りかみかざり。私のそばにこれがある限り、忘れられる訳がないじゃない。

その気がないなら、どうしてこんなものをくれたの？何が本当の貴方なのか分からない。
い。

胸が痛くて、痛くて堪らないわ。

私は三日月との賭けに負けて、眠りに落ちる。

チエスの好奇心の香水が私をまたあの夢の中へと墮おとしていく。

『ハートの女王様』は何人もの裸の狗たちの全身を撫で、舐め、頬や胸を弄もよほっていた。

男たちは奴隷のように、されるがまま。

夢中だったのかもしれない。視線が合うまで、彼女の愛撫はネットリと続いた。視線が絡み合^{から}って初めて私は気づく。私は彼女を見ていたんじゃない。見られていたことに。

「アリス、こちらへおいで。」

そう。この、独善的な喋り方をしているのも私。怯^{おび}える子どもの視線の先にいるのも私。そして、狗たちに仮面を被せて新しい遊びに興^{きよう}じているのも私。

女王様は、螺旋階段^{らせん}を隠す鏡台に映り込んでいたメアリー^顔に似ているんじゃない。『鏡の中のそれ』が、女王様^私そのものなんだわ。

私はずっと、夢の中にいたんだわ。だったら私はまだ処女のままなのね。

ラヴィの蜜蜂に遊ばれた時も、こうして狗たちに囲まれている今も。私は処女のまま溺れていたんだわ。

『犯されもせず、穢れもせず。』

デビューの舞台でスポットが落ちてきた時も、幾つものチェリーを口にして悶々としていたついさつきまでも。私は二人に弄^{もてあそ}ばれていたんだわ。

『殺されることもなく、絶頂^{愛撫}を覚えることもなく。』

私はずっと、ずっとこの夢の中で喘ぎ続けていただけ。

独り、自慰じいに耽ふけっていただけ。

その快樂とろしの虜とろしになったのは私で、その快樂を与えているのも私。この心臓が止まるまで続く、女王様私の遊び。

そしてまた、三日月の猫と青目の兎の夢へと続to be continuedいていく——